

OTANIing

大谷の「今」を伝える。「未来」へ繋げる!

2024.7

vol.239



中高本山参拝



安心して、自己を開ける場

学校長 乾 文雄

「人のわるき事は、能く能くみゆるなり。わがみのわるき事は、おぼえざるものなり。〈中略〉
ただ、人の云う事をば、よく信用すべし。わがわるき事は、おぼえざるものなり。由、仰せられ候う。〔蓮如上人御一代記聞書〕195」

(私訳)

「他人の悪いところはすぐに目につきますね。しかし、自分の悪いところは気づかないものです。〈中略〉

私たちはただただ、人が注意をしてくれることに耳を傾け、素直に受け入れなければなりません。自身の悪いところは自分では気づかないものですから」と、蓮如上人は仰せになりました。

とある家庭での、朝のひと時のことです。

その日は休みだった父親が、台所で新聞を読んでいた。しばらくすると2階から「ヤバい、ヤバい」と言いながら、高校3年生になる息子が階段を下りてきました。寝過ごしたのでしょうか。父の「おはよう」には反応もせずトイレに駆け込み、その後も時計を見ては「ヤバい」を連発しながら、せわしく用意を整えていました。ところが、少しすると洗面所から笑い声が聞こえてきます。様子をつかろうと歯を磨きながら動画でも見ているのか、立てた携帯の画面に向かって笑っていました。

近くにいた母親が「お～い、時間は大丈夫か?」と声をかけると、もう一度時計を見て「マジでヤバい!」と言った彼は、あわてて口をすすぎ、顔を洗い、着ていたパジャマから制服に着替え、戸棚を開けてパンを口に運び、弁当をリュックに入れて、玄関に向かって走っていきました。自転車でまたがるや「行ってきま～す」と声を出し、まさに嵐のように去っていきました。起きてから家を出るまで「ヤバい」が12回と「行ってきます」が1回。「おはよう」は無し。

父親はあきれながらも見送りに廊下に出ると、案の定、玄関は開けっ放し。「やれやれ」と思いながら扉を閉めて戻ってみると、トイレのドアも開いており、まさかと思って入った洗面所では、洗面台の鏡の扉も、歯磨き粉のチューブのふたも開いたまま。床を見

るとパジャマのズボンが、まるで蛇の抜け殻のように脱ぎ捨てられていました。

父親はため息をついて「お茶でも入れるか」と食器棚に向かうと、パンを取り出したガラス戸もやはり開いたまま。ついに「しかしあいつはなっていない。開けたら閉めるという最低限のマナーすらできていない!」と、急須にお湯を注ぎながら、電気ポットに向かって声を出してしまいました。

その声が聞こえたのか、流しの近くにいた母親が近づいてくるや、父親の顔に向けて指をさし、こう言いました。

「あんたもやで～」

思いもしない指摘を受けて、それでも妻には言い返せなかった彼は、今度もやはり電気ポットに向かって、「いやそんなことはない。私はそれぐらいできている」と、つぶやきました。

背中を震わせてつぶやく父親に「まあ、私もやけどな～」と妻は言い、流しの方に戻っていきました。

「まあ、私もやけどな～」という言葉のすこさ。

自分のダメさ加減を自覚することなく子どもにダメ出しをする父親に、その自覚の無さを伝えるだけでなく、「そういう私もできてないのですけれどもね」という一言で、次に引き起こされかねない夫婦間の「争い」をも回避。

「人のわるき事は、能く能くみゆるなり。わがみのわるき事は、おぼえざるものなり」という大事なことが、余韻たっぷりに伝わることです。

蓮如上人は「何としても、人になおされ候うように、^{そうろ}心中を持つべし。(どのようにしてでも、自分の心得違いを他人から直してもらおうように心がけなければならない。)」ともおっしゃっています。

大谷という場が、「もし間違っていたら、直してもらえる」との思いの元、自己を安心して開いていける場であることを願います。そういう場において、間違いを責め合うことなく、大事なことを共に学び、共に育てられる「共学・共育」の場であり続けたいと、切に願うのです。



大谷中学・高等学校
OTANI JUNIOR AND SENIOR HIGH SCHOOL

京都市東山区今熊野池田町12 TEL:(075)541-1312 <https://www.otani.ed.jp>
編集兼発行責任 宗教・国際センター長 林 陽樹